

# ウクライナ訪問の報告書

郡司 真弓

## 目 次

### 第 1、略歴

### 第 2、ウクライナ訪問について

### 第 3、訪問先の子どもたち

### 第 4、裁判に望むこと

### 第 1、略歴

私は、福島県いわき市に生まれ、1984 年から神奈川生活クラブ生協で消費者活動や市民運動を始めました。1993 年から 1996 年まで横浜西部生活クラブ生協理事長の役職につき、1998 年から 2010 年まで NPO 法人 WE21 ジャパンの理事長を務め、同時に 2004 年からは DV 被害者を支援するステップハウス・共同の家プアンの代表でもあります。昨年の東日本大震災後の 10 月に同郷の女性たちが中心となって NPO 法人ふくしま人と文化ネットワーク（以下、当 NPO といいます）を設立し、現在事務局を担っています。

### 第 2、ウクライナ訪問について

放射能汚染の被害が著しい福島の再生を考えるには、26 年前の原発事故を起こしたチェルノブイリに行き、現地の人たちの声を聞き、学ぶ必要があると考え、当 NPO ではウクライナ・ミッションツアーを実施しました。NPO 法人チェルノブイリ救援・中部ネットワークのコーディネートのもと、ツアー実施期間は本年 9 月 2 ～ 9 日、参加者は当 NPO の会員 5 人、添乗員、コーディネーターの計 7 人でした。訪問先のナロジチ市（チェルノブイリ原発から西約 70 Km）は原発事故当初、いわゆるチェルノブイリ住民避難基準という強制移住地域、移住権利地域、放射線管理強化地域がほぼ 3 分の 1 ずつありました（別紙参照）。

### 第 3、訪問先の子どもたち

#### 1、おひさま幼稚園

#### (1)、おひさま保育園について

チェルノブイリ原発事故の前、ナロジチ市には 2 つの幼稚園がありました。しかし今はこのおひさま幼稚園 1 か所です。現在、1.5 歳から 6 歳児まで 140 人が通っています（事故前は 320 人）。先生や職員は 35 人（先生は 13 人）、8 時～

夜 7 時まで保育するため、全ての子どもたちには 3 食を提供しています。



おひさま幼稚園の入り口



同幼稚園 遊戯を披露

## 2、クラフチェンコ園長先生の話から

子どもの声が聞こえる日本の保育園を想像していた私は、園内に入り、子どもたちがその場におとなしく座り、誰も広い園庭を走らず、大きな元気な声を発していないのには驚きました。

園長先生から「子どもの健康状況は変化しています。ほとんどの子どもは呼吸器、消化器、視力障害、骨の異常、倦怠感、免疫低下などの症状があり、それも一人複数抱えている。」と説明を受けた時、園庭でみた静かな子供たちの状況に納得が이었습니다。

また「ソ連時代は保養もあり、給食にフルーツやビタミンも摂取できましたが、今は3食の給食の補助は1ドルです。フルーツも出したくても出せません。」との話も聞き、病んでいる子どもたちが満足に栄養を取ることができない事実を知り、大変胸が痛くなりました。元気盛りの子どもが毎日だるいなんて、誰が想像できるでしょうか。これは異常なことです。本来の子どもの姿ではありません。



クラフチェンコ園長先生（右）



同幼稚園 静かな幼児たち

## 2、ナロジチ地区中央病院

### (1)、ナロジチ地区中央病院について

ジトミール州北部のナロジチ地区は、ウクライナでも最も汚染の激しい地域の一つです。本来、移住を義務付けられる区域であるにもかかわらず、現在まで11,000人以上が居住しています。その地域で住民たちの健康を守るための公立病院です。

### (2)、パスツウシェンコ・セルゲイ・イヴァーノヴィチ副院長のお話から

殆どの医療従事者は情報がなかったために、原発事故自体、問題として捉えていませんでした。そして、事故後もあまり体の変化もありませんでした。しかし、年が経つにつれて子どもの体に異常がみえ、特に事故後5～6年経ってからは明らかに子どもの健康に異常がみえてきました。免疫低下によって風邪がひきやすい、心臓病、脳卒中、がん、腫瘍など、健康に変化が出てきました。また、甲状腺ガンが多くなり、毎年2～3人が発病しています。これは昔はありませんでしたが、これからはますます増えるでしょう。

3～4歳児は風邪を引きやすく、呼吸器、肺炎、気管支など100%疾患があります。白血病に関しては、大人は事故5～6年後から現れてきましたが、子どもは2～3年前から発病しています。

今の課題としては、医者不足（若い世代の医者が来ない）と医療費不足（ソ連時代は足りていたが、今は不足して海外からの支援に依存）、内部被ばくの問題などを訴えていました。

また、福島へのアドバイスとしては「毎年、子どもたちは甲状腺検査を受けること」と力説していました。

私は、今まで、チェルノブイリの子どもたちの放射能被害については、ある程度認識していましたが、このように幼稚園の園長先生や病院の副院長から具体的な子どもの健康被害の生の声を聴き、大変ショックを受けました。

今、複数の病気を抱えている子どもたちは、直接原発事故に遭っていません。つまり、26年前の事故の放射能被害を受けた子供たちが26年経って結婚して生まれた子どもたちです。



ナロジチ中央病院

パスツウシェンコ・セルゲイ・イヴァーノヴィチ副院長（左から 2 人目）

その右は本書面作成者（郡司真弓）

#### 第 4、裁判に望むこと

このように放射能被害は当事者だけでなく、次世代に顕著に表れることを私は目の当たりにしてきました。ウクライナでは、事故後夏休みの 1 か月は、幼稚園、学校ごとに長期保養として放射能汚染のない他地域で生活をしてきました。しかし、それでも子どもたちの健康に影響が出ています。26 年後のチェルノブイリの子どもたちの苦しさを、福島の子もたちに繰り返さないためにも、最大の危機感をもって子どもたちを救っていくのが、原発開発を黙認してきた私たちの責任でないでしょうか。そのために、集団で子どもたちを移動できる権利を獲得したいと考えます。

年 月 日

郡 司 真 弓 

仙台高等裁判所民事2部

殿



## 別 紙

ナロジチ地区の汚染面積 (単位:100ha)

	Cs-137汚染度 (kBq/m <sup>2</sup> )	< 37	37 - 185	185 - 555	> 555	汚染面積計
			第3ゾーン	第2ゾーン	第1ゾーン	
オレフスク	1998年	360	1820	53	0	2233
	2005年	1177	1046	8	0	2231
オブルチ	1998年	73	2516	563	61	3213
	2005年	202	2772	204	33	3211
ルギンスク	1998年	3	702	218	69	992
	2005年	7	825	119	36	987
ナロジチ	1998年	13	460	410	393	1276
	2005年	23	598	414	240	1275
コラステン	1998年	487	1012	268	8	1775
	2005年	790	891	91	4	1776
計	1998年	936	6510	1512	531	9489

NPO 法人チェルノブイリ救援・中部ネットワーク 提供